

概念型探究を学ぶプロセスで学生の認識はどのように変化するか

富田 英司 Eiji TOMIDA
愛媛大学教育学部/大学院教育学研究科
大学院地域レジリエンス学環



はじめに

- ・次期学習指導要領に「概念型のカリキュラムと指導」の考え方が影響
- ・愛媛大学教育学部は「概念型探究」(Marschall & French, 2018)の実践研究を、令和3年度文部科学省委託事業を皮切りに、地域と組織的に連携して開始
- ・この実践研究の一環として、教職課程のコアカリキュラムを構成する「教育の課程と方法」で、令和5年より概念型探究による授業デザインの方法を開始
- ・本研究の目的：授業の中で受講生がどのように概念的探究を認識し、その認識が授業展開ごとにどのように変化するかを明らかにする

キーワード：概念型探究, 教授法, 教師教育

方法

参加者 2024年前期「教育の課程と方法」を受講する初等及び特別支援の学生130名
授業概要 授業のゴールは、概念型探究の授業デザインの考え方と具体的な各種授業方略を学び、その上でグループごとに概念型探究の授業案テンプレートをを用いて授業設計をおこなうこと
受講生が選択した単元 国語(小2)物語文の読解, 国語(小5)依頼の手紙の書き方, 社会(小3)スーパーマーケットの工夫, 家庭プラスチックのアップサイクル, 算数(小4)垂直・平行と四角形
調査 第6回, 第8回, 第11回, 第13回講義において、概念型探究に対する認識を測定した(項目はTable 1を参照)。回答は授業中にウェブ上のフォームを使っておこなわれた。

結果

因子分析 第6回講義109名の回答について、探索的因子分析を行いTable 1の3因子を抽出
分散分析 2要因(3尺度×4回の測定)の参加者内分散分析を行った結果、主効果, 交互作用ともに有意であった。要因1(尺度の種類)の主効果は有意($F(2, 144) = 125.726, p < .001$)。多重比較の結果、全ての水準間に有意差が認められた($p < .001$)。因子ごとの得点は因子1が最も高く、因子3が最も低い(Figure 1)ことがわかった。
要因2(測定回)の主効果も有意($F(3, 216) = 4.29, p = .008$)であり、1回目よりも4回目のほうが得点が高いことが明らかになった(調整済 $p = .048$)。他方、交互作用は有意ではなかった($F(6, 432) = .839, n.s.$)。どの要因もおしなべて回を重ねることで得点が上がっていったことがわかった。

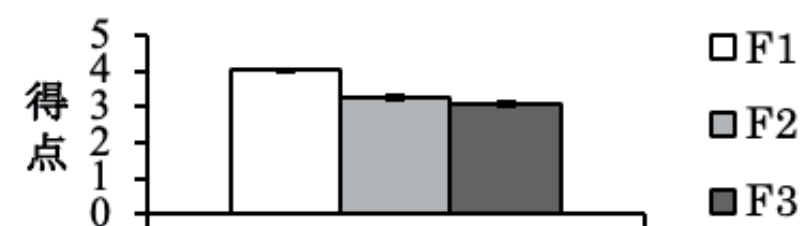
あるグループが作成したテンプレート・小5国語「敬語」(一部)

質問項目		回答
1. 児童生徒の探究的な学びを促す		発展学習
2. 児童生徒の学びの活用を促す		発展学習
3. 児童生徒の対話的・主体的で深い学びを促す		発展学習
4. 児童生徒にとって理解しやすい		基礎学習
5. 児童生徒の基礎の定着を促す		基礎学習
6. 通常の授業と似ている		導入過程
7. 授業づくりに時間はかからない		導入過程
8. 慣れればスムーズに授業が作れる		導入過程
9. 一般的な公立学校で取り入れやすい		導入過程

Table 1 因子分析の結果(一部)

質問項目	F1	F2	F3
児童生徒の探究的な学びを促す	.939	-.172	-.053
児童生徒の学びの活用を促す	.837	.089	.038
児童生徒の対話的・主体的で深い学びを促す	.789	-.056	.037
児童生徒にとって理解しやすい	.083	.531	.361
児童生徒の基礎の定着を促す	.422	.552	-.129
通常の授業と似ている	-.265	.842	.138
授業づくりに時間はかからない	-.213	.103	.853
慣れればスムーズに授業が作れる	.479	-.210	.541
一般的な公立学校で取り入れやすい	.123	.253	.565

Figure 1 因子による平均得点の違い

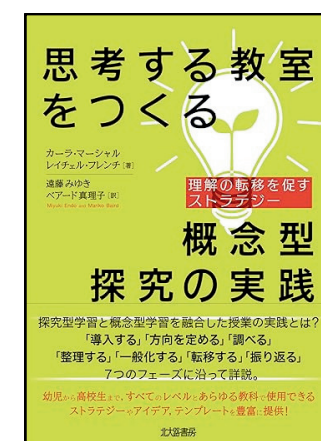
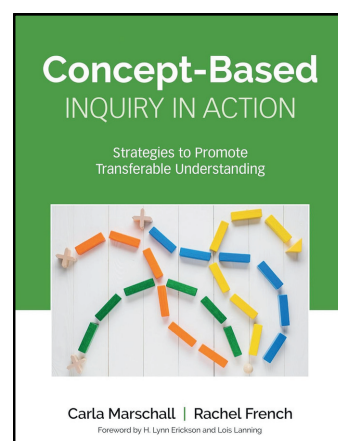


結論

- ・概念型探究はほとんどの学生にとって、理論的な枠組みががっちりしている教授法の枠組みであるが、全体的には「主体的・対話的で深い学び」を促す教え方であるという認識が最も顕著であり、回数を重ねる毎に認識も高まることがわかった。
- ・実際の授業では、「概念とその事例や、そこからの文章作りはとても難しかった」といったような理解の困難さを示す感想も多く見られている。今後の研究では、概念型探究に関するパフォーマンス評価も取り入れるなどして、どの受講生がどの段階でどこまで理解できているのかを把握できるデータを得ること、学生の理解を今後さらに促すことが可能になるだろう。
- ・今後の研究展開として、現職教諭を対象とした概念型探究の研修を支えるような研究も課題となる。

関連文献

Marschall, C. & French, R. (2018). Concept-based Inquiry in Action: Strategies to Promote Transferable Understanding. Corwin Press.



概念型探究
実践研究
グループ
ウェブサイト

